

Fate/SAVE ALL FAKER : Re

トムさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある男は願った。全ての人を救いたいと。

己が憧れている人達のように、涙を流している人を助けたいと。

そしてある日、その願いは叶えられた。空想は現実には……

これはとある兄の、贗作者ヒューゴの、戦いの物語である。

「例え世界の全てを敵に回しても、俺は大切なものを守るために戦う！
夢幻召喚変身！……いくぞ、
蔵身は十分か！」

「さあ、聖杯戦争を始めよう。」

~~~~~

どうも、初めましての方は初めまして！そうでない方はお疲れサマ  
ンサー！作者のトムさんです！

今回の作品は以前私が書いた「Fate／SAVE ALL FA  
KER」のリメイク作品となっておりますので、温かい目で見ていた  
だけたらなと思っております。

それと、「途中で読みましたがつまんなかった〜」等のコメントは  
ぜひ感想欄で教えてください。改善していきますので。

ちなみに基本日曜日の10:00ぐらいに更新したいと思っていま  
す。(初回は例外ですwww)

よろしく願います。

# 目次

|                    |    |
|--------------------|----|
| プロローグ              |    |
| プロローグⅠ             | 1  |
| プロローグⅡ             | 7  |
| 第1話 転生直後、地獄からの目覚め。 | 15 |
| 第2話 邂逅Ⅰ            | 19 |
| 第3話 想いと覚悟と訓練       | 27 |
| 第4話 始まりの街へ         | 36 |
| 第5話 邂逅Ⅱ            | 43 |
| 第6話 その瞳に映るのは……     | 51 |

## プロローグ プロローグⅠ

とある世界、とある場所に一人の少年がいた。少年は幼少期から漫画やアニメ、ラノベなどの娯楽と共に過ごしていた。学校の帰りや休日などには共通の趣味を持つ友人達と共に語り合っていた。

そんなある日、いつも通り漫画を読んでいると少年の頭に一つの考えが過った。

こんな人生話は悲しすぎる、と。

それは全部が全部、自分の求める最高のハッピーエンドというわけではなかった。

ある者は目の前で助けようとした大切な兄を殺された。

ある者はその身に宿した呪いにより大勢の人が死んだ。

ある者は神によって理不尽に異世界に召喚され、共に過ごした仲間  
に裏切られ奈落の底に落とされた。

ある者は故郷を、引いては愛する者達を守るために自ら人類の敵  
となった。

故に男は願った。

こんな悲劇を変えたいと、

犠牲になった人を救いたいと、

こんな残酷な運命を壊したいと。

そう願い続けた少年は青年となり今――

「まあ、何というか……そういう訳で貴様は死んでしまった。」

「いやどいことだよ。」

テンプレよろしく真つ白な空間に一つ、目の前に黄金の玉座に座つた最低最悪の魔王と対峙していた。

~~~~~

青年 side

やあみんな！俺だよ！今俺が何をしているのかって？そうだな
……

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ……！いつの間にか気づいたらこの白い空間にいて昨日までの記憶がないんだ……！そして目の前にはなんか黄金の玉座に座った金ピカの何処ぞの王様っぽいのが座って「お前はもう死んでいる」って言ってきたんだ！何を言ってるのか分からないと思うが、俺にも分からない……！

まあこんな感じで今俺は冗談抜きで状況が分からない。えっ？目の前の金ピカに聞けって？いやいやいや、無理だつて。だってさっきから金ピカは金ピカでなんかブツブツ言ってるし、なんか王のオーラみたいなのが溢れてるから話しかけられないからなく

「ふむ、なんと説明するべきか……」

「……なああんた。」

「？」

けど俺はそうも言ってもらえない状況だから勇気を出して話しかけた。

「まず俺はいつ死んだ？死因は？というか俺はなんでここに——」

「まあ待て。そう一度に質問するな。いくら私とて聖徳太子にはなれん。」

「……ほんとにそうか？」

「なに？」

「俺にはどうしてもあんたが嘘を言ってるようにしか見えない。まあでも、根拠とか理由とかはないけどな？」

「……一つ聞きたい。私の名前はわかるか？」

「?いや、悪い。分かんねえ。わかんねえけど、なんか知ってる気がする。」

「……ほう。」

そう言う和金ピカは俺をじつ……つと見つめ少し悩む素振りをした。

「ふむ、これは……なるほど、記憶が……ならば知らなくても無理はない、か……」

「?なあ、さつきからブツブツ何言ってるんだ？」

「ふむ、どうやら貴様はここに来る過程で生前の記憶が抜け落ちているようだな?故に少々強引だが私の力で思い出させてやる。」

そう言う和金ピカは玉座から立ち上がり、俺の方に近寄って俺の頭に手を置いた。

「……な、なんだよ?」

「悪いが少しだけ頭痛がするぞ?安心しろ、痛みは一瞬だ。」

「ツ!ぐつ、ぐあああああつ!」

しばらくお待ちください

「はあ、はあ、つく、そ……急にやんのは、流石にないだろ……!」

暫くしたら痛みが徐々に収まり途切れ途切れだが話せるようになった。元凶の金ピカはいつの間にか玉座に座ってふんぞり返って

た。

「まあそんなに怒るな。それで？記憶の方はどうだ？しつかりと戻っているのか？」

「……まあな。けど全然痛みが一瞬じゃねえじゃんか！めちやくちや長引いたじゃん！ぎっけんなよ！」

「そのぐらい口が回れば問題あるまい。」

そう言った金ピカ——いや、最低最悪の魔王、オーマジオウに文句を言った。ちなみにだが俺は現代を「ソウゴ君」、未来を「王様」と呼んでいる。

「はあ、全く……何であんたはいつもやることなすことが規格外なんだよ。もうちよつと自重しやがれってんだ。」

「断る。」

「即答かよ！」

「何故なら私は生まれながらの王だ。」

「パワーワード過ぎんだろ！」

俺が王様のぶっ飛んだ発言に驚いてると言うのに王様は俺の気持ちなどいざ知らず、溜め息を吐いて再び話始めた。

「……まあよい。それより話を戻すがお前の死亡時刻は兎も角、死因は大体分かつてると思う故省力するが、お前がここにいる理由はただ一つ。私がお前を転生させるためだ。」

「……はあ!!？」

転生!?!転生ってあの、巷で噂の俺TUEEEEEとかご都合主義とかそんな感じのか!?!ナンデ!?

「まあ転生についてはお前が思っていることと同じ感じだ。」

「待て待て待て！何で俺が転生するんだよ！あれだろ？転生する奴って八割方めっちゃスゲエ善人って聞いたぞ！つーか人の心も読めんのかよ！あんたホントスゲエな！」

「誉めてるのか貶してるのかどっちなんだ。それは兎も角、善人だけが転生するというのは、あながち間違いという訳ではないが少し違う。転生する者は転生させる側がランダムで決めている。故にそこに善人か悪人かというのは特に関係ない。だがとてつもない悪人の場合は転生はさせないようにはしてある。所謂暗黙の了解と言うやつだ。ああ、一応ここで言つとくがその転生する者は転生させる側がミスであれなんであれ死んだ者にのみ適応される。一部例外はいるがな。」

そりやそうだ。生きてる奴を突然転生させたら残された人達は突然行方不明になったって言つて困惑し、中には死んだ時以上に悲しんで泣く人も現れるだろう。だったら既に死んでいる人を転生させた方が何かと都合がいいとでも考えたんだろうな。

「まあそういう訳でお前は死んで私に選ばれ転生する。どうだ、これで理解できたか？」

「……ああ、まあ、うん。理解はできた。何で俺が選ばれたのかわつてのは疑問だが……」

「その事については時が経てば話そう。」

「……それは今言えないことなのか？」

「言えんことだ。」

「……そうか、分かった。なら今は聞かないでおこう。んで？俺はどこの世界に転生するんだ？」

「Fateの世界だ。」

「ウソダンドドコドーン！」

俺は王様からの実質死刑宣告を受けて、膝から崩れ落ち、orzの姿勢になってしまった。こんな姿勢になった俺は悪くない筈だ。

まあ王様の話をまとめると、どうやら俺は死んで転生させられてす
ぐに殺される運命にあるようだ。F^運a^命t^命e^命だけに。誰か助けて
……

プロローグⅡ

前回の3つの出来事！

1つ！目が覚めたら突然白い空間にいた！

2つ！目の前にいるオーマジオウが、青年の記憶の一部を復元した！

そして3つ！青年の転生先は魔術師たちが殺し会うFateの世界だった！

~~~~~

青年side

マジか。俺、Fateの世界に転生されんのかよ……………てゆるか、オーマジオウの力つて転生先まで選べんのかよ。

「……………つか俺、Fateのどの世界線に行くんだ？」

Fateの世界は大きく4つの世界に分けられる。

冬木の第三次聖杯戦争で復讐者アヴェンジャーのアンリマユが召喚されればZeror、Staynightの世界線になる。(この2つは違いはあるが概ね同じ世界線だ。)

裁定者ルーラーの天草四郎時貞が召喚されればApocryphaの世界線。

そして現代よりもっと前、神代以前の時代に分岐した世界、EXT RAの世界線。

さて、どの世界も死亡フラグは満載過ぎるけど、みんなはどの世界線に行きたいかな？俺はできればStaynightの世界線がいいたく。この中だったら一番優しい……………と思うから。

「二応第五次聖杯戦争の世界線だが、それがどうした？」

「……………ああうん、ここは喜ぶべきなんだろうけどなんだろう、当りくじ引いたのに内容がえげつなかつた時の気分。」

一番マシな世界が当たったのに死亡フラグのせいで素直に喜べない現実。でも特にこれと言って終始絶望しかないって訳じゃないからな

……だか待てよ

(いくら第五次って言ってもあのFateの世界だぞ。型月時空だぞ？よくよく考えてみれば第五次も他のアニメ作品よりも10倍も100倍も、いやそれ以上に死亡フラグ満載じゃねえか！)

「王様！やっぱり転生先を他の世界に変えてくれ！俺はもう死にたくないー！」

「無理だ。」

「ウソダドンドコドーン！（二回目）」

終わった……俺の第二の人生、始まる前に終わってしまった……

「……何を落ち込んでいるのかは大体分かるが、そんなに落ち込むな。今ある選択肢の中でまあまあいい世界を選んでやったんだぞ。」

「……その他の世界は何だったんだよ。」

「そうだな……アカメが斬る！の世界、呪術廻戦の世界、シンフォギアの世界、他には——」

「……それって転生特典とかあるのか？」

「無いが？」

「ウソダドンドコドーン！（三回目）」

神は死んだ。この世には希望もクソもないのか……

「だから私は言ったのだ。今挙げた世界の中で一番まともなFateの世界に転生させると。」

「いやいやいや、転生特典が無いんだったらどの世界でも同じだって……」

「お前は一つ忘れてないか？Fate、いや、型月の代名詞の一つは何だ？」

「何って、魔法とか魔術とか……はっ！」

「そう、お前が行くfateの世界でお前は魔術を、より正確に言うのなら魔術回路が手に入れられる。つまりすぐに死ぬ訳ではないのだ。」

「た、確かに！あれ？でも……」

学生時代にFateに詳しい奴の話によると、魔術を行使するにはまず魔術回路があることが大前提で、体内や体外から魔力を消費して初めて魔術が使えるって話だったから……

「……やっぱ転生先次第じゃねえか！」

「何を言ってる？」

「いやいやだって、転生先が魔術師の家系じゃなかったら魔術使えねえじゃん！他のアカメはともかく呪術はFateと同じで家柄とかで決まるじゃねえか！シンフォギアなんか論外だ！」

アカメ？よう分からん。帝具？もつと分からん。なにそれ美味しいの？

「まあとりあえず一旦落ち着け。」

「いや落ち着けんわ！いや待てよ……そうか！そもその話、原作キャラに関わんなきゃいいんだ！俺としたことが、こんな初歩的な事に気付かないなんて、何て失態——」

「ふん！」

「ヴェッ！」

俺が考えを一纏まりにして解決策を作ったら特に何の前触れもなく突然殴られた。これが俗に言う『特に理由のない暴力が〇〇を襲う』ってやつか……

「戯けが。ふざけている場合ではないのだぞ。こちらには時間が無い

のだ。」

「えっ、時間が無いってどういう——」

「とにかく、さっさと次の説明に入らねばならん。ここからはおふぎけなしだ。」

「お、おう、分かった……………」

王様が何を考えているのかわからんが、とりあえずここからは真面目に聞こう。

「とにかくお前はこれからFateの世界の第五次聖杯戦争の世界線に転生してもらう。異論は認めん。」

「いや酷くね?」

「黙れ」

「あい—」

王様、コワイ…………コレ、ゼツタイ。

「…………先程も言ったが、魔術に関しては気にするな。どう足掻いても手に入れてしまうからな。」

「…………それはそれで怖いな。」

「まあそれは許せ。それとよくある話だが、転生特典は手に入れられるかもしれないかもしれない。」

「つまり俺の運次第って訳か。」

「そうだ。だから特典に関してはただ祈って待っておけ。」

「はあ、了解した。」

「それとお前の転生に関してだが、お前の場合はただの転生ではなくいわゆる憑依転生と言われるやつだ。ちなみに憑依先には魔術回路が既にある。まあ今すぐ魔術を行使できると言う訳ではないがな。」

な、なるほど。用は俺の魂がFateの世界の空っぽの肉体器に入るって事か。…………あれ?

「王様、そしたらさつき話してた魔術回路が云々って話……いる？」  
「どちらかと言うと必要なかったが一応説明を入れておいた方が分かりやすいと思った故な。所謂保険と言うやつだ。というより貴様が話を聞かなかつたからと言うのが大半を占めているがな。」

「うぐつ……さーせんした。」

「気にするな。それと憑依先には名前があるのだが……」

「ん？俺名前変わるの？」

「当たり前であろう、他の人間に憑依するのだ。名前は変わって当然だ。それに貴様はもう既に前世の自分の名前を思い出せんだろう。」

「……言われてみれば確かに。自分の人生がどんなだったのかも分かんねえな。」

「まあそれらは全て元に戻せなかつたんだがな。」

「ん？どういう事だ？さつき俺の記憶思い出させたんじゃないの？」

「すまない、あれは嘘だ。実際には記憶を思い出させたのではなく一部を復元した、というのが正しいだろう。内容は自分に関することの一部だ。ライダーの記憶などは私が後付けで加えたものだ。まあ大人の事情とでも考えておけばいい。」

大人の事情なんてねえだろ、とツツコミたかったがそこは耐えた俺であった。

……しかし復元した、か。まさか王様が元に戻せないほどなんて……俺結構記憶力には自信が……なかつたけど忘れっぽくはないはずだったんだけどなく。若しくはなんかもう魂の浄化みたいなもので俺の身の回りの事のみ洗い流されちゃったのかな？

「とにかく、話を戻すがお前の憑依先の件だが……」

「……そういやそんな話だったっけ。ほんじゃあまあ、よろしく頼むぜ王様！」

「お前の憑依先は……」

王様が憑依転生先を発表しようと言うときに俺は足元の方に違和感があり、足元を見てみると体から赤色の粒子が出ていた。

「ん？……あれ!?なんか俺足元から薄くなってるない?」

「……しまった、時間が来たか。」

「ちよつと冷静すぎない!?俺今どんどん薄くなってるんだけど!」

なんかビルドの世界のライターが消滅するみたいな感じで粒子と共に俺の体が薄くなっていく。あつ!そういうえば……

「ちよつ、ちよつと待って!俺まだ誰に憑依転生するか分かんないんだけど!」

「すまない、私とお前のせいだがもう詳しく説明することはできない。

「俺のせいではねえだろ!」黙って聞け。お前はこれからFateの

■■■■の世界の衛宮士郎に憑依する。年は7つだ。」

……え?衛宮士郎?主人公やん。モブやと思つたらガツツリ主人公やん。反応に困るんだけど。つかちよつと聞き取れなかった部分があるんだけど。Fateのどんな世界なの?

「すまない、詳しい話はお前が転生したら話す。そのときは真面目に聞けよ?」

「だからなんで俺のせいなんだよ!あんたにも問題が——」

王様に対する不満を言い切る前に俺の体は消滅した。最後に文句を言いそびれた事を悔しがっていると、次の瞬間、頭の中に知らない記憶とノイズが走った。

『■■は■■で■■ている!』

『俺は……■■■■になる■だ!』

『■■■■で■■■はし■■■い!』

『■■■!』

『と■■■■のは■■■にも■■■■ない!』

『負■■■■……■■■■アアア!!』

(なんだ、今の記憶は……俺にこんな記憶はない。じゃあ誰のだ？ いやそもそもこれは記憶なのか？ もしかしてこれは——)

その言葉を最後に俺の意識は途絶えた。

士郎 side out

~~~~~

三人称 side

「……行ったか」

オーマジオウは青年が消えた粒子の後を玉座から眺めながら呟いた。

「これで本当によかったのだろうか……」

そう呟き彼は立ち上がり指を弾いた。その瞬間、世界が変わった。真っ白な世界からどこか近未来的な世界に変わった。いや、世界が変わったのではなく、彼が正しい世界に帰ってきたのだ。

元々彼と青年がいた場所は世界から断絶された場所、どんな存在にも干渉されない絶体的な空間に二人はいたのだ。そしてオーマジオウ——2068年の常盤ソウゴは変身を解除し元の姿に戻った。

「ふう……やはり他のライダーに任せなくてよかったな。あれでは一向に話が進まん。」

何故オーマジオウが青年に会ったかと言うと、他の先輩ライダーが会ってもよかつたが、そうすると話が複雑化し何も伝えられずに転生させてしまうから、仕方なく自分がやろうと躍り出たのである。

「あの者の行き着く先があんな未来もとは思いたくは無いが、心配は無

用であろう。」

彼が自分の能力の内の一つ、未来予知を使い青年のこれからの人生を見てみたが、それはあまりにも過酷な未来人生であった。だが彼の言う通り心配はいらぬ。何故なら青年には多くの頼もしい仲間ができるからである。

「さて、ウオズ。」

「はっ、ここに。」

魔王がそう呼ぶとその背後に黒い軍服のような服に同じく黒いストールを巻き付けた男——ウオズがいつの間にか跪いていた。彼は魔王の仲間であり魔王がもつとも信用し信頼している配下である。

「これからあの青年……いや、あの少年を時々でいい、導いてほしい。かつて私にしたように。」

「我が魔王の仰せのままに。」

そう言つてウオズはストールを翻し、全身を包み込むとその場から消え去った。

「さて、少年よ。貴様の物語、険しい道のりではあるが乗り越えて強くなれ。私はいつでも貴様を見ているぞ。」

第1話 転生直後、地獄からの目覚め。

三人称 side

「ここはとある国の何処かにある街。そこはごく普通の街であった。住民がお互いに助け合い、スーパーは主婦などで溢れ、学校の友達と遊んだりする、ごく普通の当たり前のような日常がそこにはあった。」

電柱の上に乗ってる男、ウオズは街を見下ろしながら自分のいる場所を説明した。

「……だがそれは今はもう過去の話。」

そこへ燃え盛る炎の波と共に、本来なら聞こえる筈のない、いくつもの悲鳴が街全体から上がった。

「今人々の目の前には全てを焼き尽くさんとする炎が街を飲み込んでいた。住んでいた家は壊れ、お気に入りの店も壊れ、家族は燃えて死に、逃げ場もない。正に地獄絵図が彼らの前にあった。」

ウオズはストールを使い電柱の上から消え、町外れにある街を一望できる教会の塔の上に現れた。

「何故このような惨状になったのか、住民には全く心当たりはない。それもその筈、これは裏の人間が起こしてしまったものだからだ。そう、まるで衛宮切嗣が冬木で起こしたあの大火災のように……おつと、少し喋りすぎましたね。」

ウオズは全く反省する気もなくうつかりといった感じで手に持っていた本を開き目的のページまでパラパラとページをめくった。

「この本はとある青年が Fate の世界の衛宮士郎に転生することか

ら始まる。ふむ、いまはまだ七歳だから、そうだな……よしこうしよう。コホン。」

ウオズは改めて咳払いをし、本を開いた。

「この本によれば、普通の少年衛宮士郎。彼にはいずれ養父となる衛宮切嗣から魔術を習い、魔術使いとなる未来が待っている。だが魔術使いとなった彼に待ち受けるのは、果たして希望か絶望か。

そして彼がいることによって世界にはどんな影響があるのか……おっと、ここから先は皆さんにとってはまだ未来のお話でしたね。……おや？」

ウオズは街の方に目を向け、暫くすると何かを見つけたかのように目を細めた。

「ふむ、なるほど。もうそこまでいきましたか。では皆さん、私の役目は一先ずここまで。ここから先は、彼の選択次第です。彼のその後的人生が地獄かどうか、皆さんの目で見届けてください。」

ウオズが本をパタン、と閉じるとそこにウオズの姿はなかった。そこに始めから何もなかったかのように……

三人称 side out

~~~~~

三人称 side

熱い、意識がはつきりしていくと共にまず感じたのはそれだった。辺りは燃え盛る炎に囲まれ建物は崩れ去っていた。

「なんで、ここから始まるのかな……」

そう、俺が目覚めたところはあの冬木の大災害が起こっている時に目覚めた。ちょうど道中で倒れていたところに俺の魂が7歳の衛宮

士郎の肉体に入り転生が完成した。そこからは今の自分でも助けられる人がいないかと、ただひたすらに歩き続けた。

だが現実とは違った。

歩いても歩いても、たまに呼び掛けてもそこにあるのは瓦礫の山か炎によって焼かれた人だったモノしかなかった。まさしくそこは地獄という名にふさわしい場所だった。

「はあ、はあ、くそっ……暑いし煙いし視界は悪いしで、最悪じゃねえか、全く……これじゃあ、誰も助けられねえ………」

少年、いや、衛宮士郎はただただ己の無力に嫌気がさした。それには限界に近かった。いつ倒れてもおかしくはなかった。

「また、あの時と同じ……っ!」

だが士郎は限界に近かった体を無理やり動かした。その心は前世で見ていた彼らの様になりたいという思いからきていた。

「そうだ。俺は、まだ、倒れない……!まだいるかもしれないんだ。まだ……!」

その言葉とは逆に体は瓦礫の山に倒れた。

「何、でだよ……!なんで、倒れんだよっ!俺はまだ、だれも……!」

士郎はまだ諦めずに体に無理をいわせ瓦礫の山を支えに立ち上がり少し盛り上がりつつ丘へと向かった

「もう、少し……もう少しで……っ!」

頂上に着きそうなところで瓦礫を踏み外し、士郎はそのまま瓦礫の山に仰向けに倒れた。

「ガハッ、ぐっ、ゲホッ、ゲホッ……く、っそが……！もう、動かねえの、かよ………」

思いつきり倒れた衝撃でボロボロだった士郎の身体はもう動かなくなった。せいぜい腕をギリギリ上に向かつて伸ばせる程度だった。

(結局俺は、あの人達みたいにはいかなかったな………)

時間が過ぎていくと共に視界がだんだん暗くなっていくのを感じ、士郎は己の限界を感じた。

(転生して数秒でまた死ぬとか、ほんと、最悪、だわ………)

士郎はついに限界に達し意識を失った。

最後に士郎が見たものは目の前で涙を流しながら感謝を述べている黒い男だった。

## 第2話 邂逅Ⅰ

前回の3つの出来事！

1つ！転生した士郎がいた街が災害に見舞われた！

2つ！自分の目の前で死んでいく人達を士郎はただ見ている事だけしかできなかった！

そして3つ！士郎は地獄の中で伸ばした手が誰かに手を掴まれた！

~~~~~

士郎side

(……知らない天井だ。)

やあみんな、人生で一度は言いたいセリフTOP100(適当)を言えた士郎だ。

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！気がついたら気絶していて真っ白な天井の部屋にいたんだ。何を言ってるか分からないと思うが俺にも分からないんだ。

まあおふぎはここまでにしといて、真面目に話をしよう。現状から察するに、どうやら俺はあの地獄の中で誰かに助けられたということだ。最後の記憶として覚えているのは、あの地獄の中で手を伸ばしその手を誰かが掴んだってことまで。そこから先はおそらく気を失って病院のベッドにいると。

(……さて、病室こごに来るのは誰になるのか。彼か、彼以外か……)

原作どうりならここで後の養父となる衛宮切嗣が来て士郎ことを引き取るっていう事になるけど、ここはもしかしたら原作とは別の世界線かもしれない。

その理由は王様が俺を転生させる時にノイズみたいなのがかかって内容は分からなかったが、原作にはいなかった存在がいるもしくは物があるという事だ。つまり俺を助けたのは原作どうり衛宮切嗣かもしれないし、はたまた別の人物かもしれない。

だがここで一つ問題が出てくる。さっきも言ったがそれは俺を助

けた人物が衛宮切嗣ではなかった場合だ。もし、衛宮切嗣に助けられこの後来るのだとしたら俺は彼に引き取られるだろう。しかし、衛宮切嗣でなかった場合、俺は施設などに引き取られるだろう。普通ならまあそれでもいいと思うが、俺の場合そうではない。なぜなら施設なんかに行けば、俺は魔術を教えてもらえず、何もできずいつの間にか全てが終わつてるといふ事が起きてしまう。それはすごく困る。

これから起きる未来の事を知っているのにそれを見過ぐすという行為は俺には出来ない。理由は単純に二つ、後悔するからなのとライダーの人達なら動くと思つたからである。

(もういつそ病院を抜け出して独学で魔術を学ぶか……いや無理だな。魔術回路をどうやって開く事すらわからない奴がどうやって魔術を行使するんだよ。魔術師や魔術使いに伝手があるわけないし、はあ、結局詰んでるな……)

俺がそうやって一人考え込んでいると病室のドアが開く音が聞こえた。やっとかと思いつつも誰が来たのか気になってそちらを向けば、とりあえず懸念していたことは一つ消えた。そこに立っていたのは全身黒ずくめで生氣のない目をした男——衛宮切嗣がそこには立っていた。

~~~~~

「……さて、先に自己紹介をしとこうか。僕の名前は衛宮切嗣。好きに呼んでくれて構わない。君に聞きたい事がある。あの災害で覚えている事はあるかな？」

「……何も、覚えて、いない、でも、一つだけ、覚えてる……」

目覚めたばかりだからか声を絞り出すように途切れ途切れで出した。

「……なにを、覚えているんだい？」

「……自分の、名前、しか覚え、ていない……」

「……そうか。そういうえば名前を聞いていなかったね、よければ名前

を聞いてもいいだろうか？」

俺は頷いて返事を返した。

「……俺の、名前は、士郎、だ。」

「……士郎、か。そうか、教えてくれてありがとう。さてここからが本題なんだがいいかな？」

俺はもう一度頷き返事を返した。すると切嗣を右手をチョキの形にして顔の前に持っていった。

「君には二つの選択肢がある。一つは施設に引き取られるか、もう一つは僕に引き取られて養子になるか。君はどっちにする？」

この質問に対して俺はもう答えは出ている。だからそこまで悩む必要はなかった。

「……俺は、あんたの、養子に、なる。だから、これから、世話に、なる。よろ、しく、頼む。」

俺はそう言っ頭を下げた。最初から決めていた事だ。後悔はない。

俺が切嗣の養子になる事を伝えると切嗣のただでさえ死んでいた目に光が戻り口元が少し柔らかくなった気がした。

「……そうか、わかった。では僕は手続きなどをしてくる。けどすぐに退院できるわけではないからしばらくは入院生活をして待っていてくれ。」

そう言っ切嗣は扉の方へ歩き出した。扉の前まで行くとああそうだ、と言い優しい顔で振り返った。



「士郎君、一つ言い忘れていた。」

「……………」

「僕はね、魔法使いなんだ。」

「……………じいさん、すげえな。」

そう言つて少し微笑んで、切嗣——じいさんは部屋を出ていった。

~~~~~

時は経ち、俺は数日前にようやく退院できた。今はもう流暢に喋ることができる。

そして俺は切嗣から色々とその世界について教えてもらった。

まず一つは、俺が転生した時代についてだ。時代的には前世と変わらず現代だった。ただ俺が生きていた時代よりかは数年昔だった。実質過去にタイムスリップしたと考えた方がいい。

そして二つ目は、今回の大災害の原因だが表向き理由はいまだに分かつておらず突然起こった原因不明の災害、として処理されてるらしい。これは後にじいさんに聞いたところ、あれは魔術的な儀式が失敗した事で意図せず起きてしまった災害との事らしい。儀式の内容が何だったのか聞くとじいさんは顔をしかめて、君は知らなくていい事だつて言つてその内容までは教えてくれなかった。

それはともかく
閑話休題。

話は変わるが今俺が何をしているかと言うと、この街でじいさんが拠点にしていた家でじいさんの荷造り——せいぜいキャリーバッグ二つ分しかないが——の手伝いをしていた。けど、一つ問題が……………

「……………じいさん、この銃が入ってるケースはどうすればいい？」

「……………ん、それは分解してこっちのケースに入れてくれ。」

その荷物の中身が全て銃や手榴弾といった重火器類だった。驚いてなあにこれえ？とじいさんに聞いたら全てじいさんの仕事とやらに必要な物だったんでそれで納得した。えっ？何故それで納得したのかだつて？じいさんの仕事に関しては退院した時にこの拠点に着く前に概要だけ教えてもらった。最初に聞いた時は驚いたよ。でもそういう傭兵みたいな仕事をして生計を立ててるのは前世から知っていたからすぐにああそうか、って納得した。

そして俺達はまあまああつた銃の山を全て分解して、ケースに仕舞い込み、じいさんが用意した車の前までやってきた。

「ふう、これで全部かな？」

「ああ、あとはこれを車に積み込み空港に向かう。」

「まるで海外に高飛びしようとする奴らみたいだな。」

「……そう見えるかい？」

「事情を知らない奴らが見たらもしかしたらね？さて、俺はこれを車に積んでくるよ。積み込む順番とかある？」

「……ならこっちのケースから入れてくれ。今あるもので一番大きいからね。」

「YES BOSS」

そう軽口を言った後に俺は言われた通りに大きい方のケースを車の運転席と助手席の後ろの床に詰め込んだ。

「……さて、それじゃあ空港に行こうか。」

「やつとか。俺多分海外とか初めてだな。それで最初はどこに行くんだ？」

「まずは中東の方に向かう。そこに標的ターゲットがいる。」

「ほくん、見つけたらどうするんだ？」

「……無力化して依頼人へ引き渡す。」

「そっか、なら殺しはしないんだな。」

「……ああ、殺しはしない。」

俺達は話しながら車に乗り込み、じいさんはそのままエンジンをかけ車を発進させた。そう言えば……

「なあ、じいさん。あの家ってどうなるんだ？」

「あの家はもともと僕にこの町に来させた奴が用意したものだから、気にしなくていい。」

「……そうか、わかった。」

少しじいさんの口調が変わったことに反応したが、俺はなるべくそれを顔に出さないようにした。

~~~~~数時間後~~~~~

それからしばらくして、今俺達がどこにいるかと言うと……

「やってきました！・中東！」

そう、当初の目的通り俺達は空港から中東のとある国にやってきた。

「……士郎、あまりはしゃがないでくれ。目立ってしょうがない。」

「えっ？……ああ、ごめんじいさん。海外って初めてだったからさ、ちよつと舞い上がりすぎちゃったわ。」

(前世含め)覚えている限り、初海外に俺は少しテンションが上がってしまった。反省、反省、反省。

「……気をつけてくれれば、それでいい。」

「ああ、悪いな。」

そう言うじいさんは相変わらず死んだ目をした顔で荷物を持って空港を出た。

「……それでじいさん、これから俺達はどこに行くんだ？」

「これから僕達は町外れにある拠点に向かう。そこで標的ターゲットの対策などをする。」

「俺の役割もそこで教えられるのか？」

「ああ。と言っても君の役目はシンプルだからそこまで気を張らなくてもいい。」

「なるほどね。OKだ、じいさん。どんな任務も俺に任せておけつて、な？」

「……そうなった時は、遠慮なく使わせてもらおうよ。」

「……おう！期待しとけよ！」

俺を使う……その言葉に俺はあえて何も言わなかった。それはあの病室ではじめに言われた事だから……

~~~~~数時間後~~~~~

そして俺達は目的地である町外れにある拠点に到着した。が、俺の身体は既にボロボロだった。なぜなら――

「はあ……はあ……はあ……」

「……土郎、君、そんなに体力なかったかい？」

「はあ、違う……！俺の、体力が無いんじゃない……！拠点ここの立地が、おかしいんだ……！」

町外れにあると聞いていた拠点は実際に行ってみると町外れになどなく、山奥にあると言った方がしっくりくる。さらに悪い事にその山はえげつないぐらい足場が悪く、道中その場で忍者の修行場か！つてツッコんでしまった。

「はあ、はあ、とにかく、ここが拠点なんだろう……？」

「ああ。ここは見つかりにくいというのもあるが士郎を鍛え上げる場としても適していると言っている。」

「俺の、鍛える、場所？」

えっ、マジで修行場なの？ボケる前にツッコんじやった感じ？

「今の士郎は戦場で生きていくにはあまりにも足手まといだ。」

俺はようやく息が整った状態で喋れるようになった。

「まあ、そうだな。ついこないだまで一般人として生きてきたっぽいからな。そりゃ戦場ではすぐ死ぬタイプだろうな。」

「だからここで君を何とか生き残れるレベルまで鍛え上げる。まあ僕自身あまり身体能力が優れている方ではないからそこはあまり期待しないでほしいが、身のこなし程度なら教えられる。」

「身のこなし……まるで忍者の修行みたいだな。」

「僕もそう思ったよ。それじゃあ今日は荷物を片付けて終わりにしよう。計画は追って連絡する。」

じいさんはそう言って家の中に入ろうとする。それに俺は待ったをかけた。

「……なあ、じいさん。ちょっと待ってくれないか？」

「……何だい、士郎。僕はこれから計画を立てなくちゃいけないんだが——」

「いや、それは申し訳ないがそれよりも大事な事なんだ。じいさん、一つだけ頼みがある。」

「……内容にもよるが聞くだけ聞いてみよう。何を僕に頼みたいんだ？」

「ああ、じいさん。俺に、魔法を教えてください。」

第3話 想いと覚悟と訓練

前回の3つの出来事！

1つ！士郎は後の養父となる衛宮切嗣に助けられ病院の一室で目を覚ました！

2つ！無事退院した士郎は切嗣の仕事の手伝いをする事になった！

そして3つ！士郎は切嗣に魔術を教わろうとした！

~~~~~

士郎 side

「じいさん、俺に魔法を教えてください。」

俺は家の前で立ち止まっているじいさんに魔術を教えてもらえるようにお願いした。せっかく体を鍛えるなら同時に魔術を覚えるのがちようどいいと思ったからである。まあその当の本人はと言うと、顔を少しこちらに向けたただけだった。

「……それはなぜだ、士郎？」

「じいさんの仕事は魔法が関連していると思ったから、かな？」

「……その根拠は？」

じいさんは顔の向きを前へと戻し俺への質問を続けた。相変わらず背を向けているから具体的にどんな表情をしているかは分からないが、振り向く時のじいさんの目はさつきよりも細くなっていた。

「じいさんの仕事が傭兵みたいなものだったのは分かったし、それがどんなに危険な仕事なのかもわかった。でもそれにしてはじいさんはそこまで屈強って程じゃないし、どっちかって言うとお暗殺者って言われた方が納得がいく。」

「……それだけじゃあ、説得力が足りないな。」

「ああ、俺もそう思った。だから短い間だったけど、俺とじいさんの間にあった出来事を思い返してみたんだ。そしたら一つだけ引つかかる事をじいさんが言っていたんだ。」

「引つかかる、事？」

じいさんはやつと体ごと俺の方を向いた。じいさんの顔を見るにそんな事を言ったかなどと考えているのがよくわかる。そんなじいさんの考えをよそに俺は答えを出した。

「なあじいさん、俺と初めて会った時の事覚えてるか？」

「……ああ、覚えているとも。」

「そんな時じいさん、部屋を出る時に言ったよな？ 自分は魔法使いだ“って。」

「……そんな事も、言ったかな？」

「ああ、言ってたな。」

じいさんにそう言うで一瞬体が強張り顔にも影が差した気がするが、気のせいだと思い話を進めていく。

「だから俺を助けた時も、仕事の時もその魔法つてのを使ってるのになって思ってた。どう？ 当たってる？」

俺の答えにじいさんは何も言わず、ただを俯いているだけだったが、しばらくして顔を上げようやく口を開いた。

「……仮に僕が士郎の言う通りの魔法使いとしよう。士郎、君は僕から魔法を教わって何がしたいんだい？」

「何がって、そりやもちろんじいさんの仕事の手伝いを「手伝い？」

「……じいさん？」

じいさんは俺の言葉にかぶせるように話すと、手に持っていた荷物

などをその場に落としフラフラとした足取りで俺に近づいてきた。

「……じ、じいさん？」

俺はそのままじりじりと後ろに追いやられ、木にぶつかりようやくじいさんも止まった。

「手伝い？ 一体僕の何を手伝うって言うんだい？」

「えっ？ そ、そりゃあ——」

「魔術を習得して、何をするんだ？ まさかそれで人を助ける、何て言うつもりじゃないだろうね？ もしそうなら君は魔術に幻想を抱きすぎている。」

「幻想……」

「そうだ。魔術とは等価交換だ。必ず代償が必要になる。それは自らが払える範囲の代償を払えばそれ相応の対価が返って来る。が、それ以上のものを望めば必ず破滅する。君にその覚悟があるのか？」

「俺の、覚悟……」

「そうだ。ある者は行使するたびに地獄のような苦しみを伴い、ある者は体の感覚が徐々に失っていき、またある者は自らに関する記憶が消えていく。君は……魔術にそんな代償を払う覚悟はあるのか？」

「……」

「どうなんだ、士郎？」

そうだ、俺は忘れていた。魔術はそんな万能の代物じゃないんだ。万能ならばあの時の災害を止められているはずだから。だがそれはできなかった、という事はそれを行うための対価が存在しなかったから、と考えるのが自然だ。

話は戻るが俺は魔術を習得して何がしたいんだ？

じいさんに恩返しがするため？



——もちろんそれもあるが、一番の目的ではない

あの事件で死んでしまった人たちの分まで生きるため？

——それもあるが、違う

世界のため？悪人を倒すため？じいさんのため？

——違う、違う、違う

じゃあ俺は何のために、魔術を覚えるんだ？

——お前は、お前がしたいように生きろ！

(俺が、したいように……………)

俺の頭にそんな言葉が不意に流れた。誰の言葉かなんてわからない。もしかしたら今世での俺の親や親戚、知り合いのなのかもしれない。はたまた前世での知り合いかもしれない。けどその言葉で俺なりの答えは出た。

「俺は……………」

「？」

「全部は、救えないって分かっているつもりだよ。だから……だからこそ！俺の手の届く人を救える人を救うんだ！」

「……なら、その手の届かない人はどうするんだ？諦めるのか？」

「手が届かない、それで諦めるんじゃない。手が届かなくても手を伸ばすんだ。手を伸ばしたらもしかしたら助けを求めているその手を掴めるかもしれないから……」

「……その結果、自分が傷つくことになるかもしれない。最悪の場合、死ぬ事になるかもしれない。それが分かっているのか？」

「……ああ、わかってる。」

「ならどうして……」

じいさんの顔は表情を出さないようにしてるがそれでも悲しいっていうのがあふれ出ていた。正直驚いている。じいさんがこんな表情をするとは思っていなかったからだ。

「……手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔する。」

「!!」

「それが嫌だから、手を伸ばすんだ。ただ、それだけだ。」

俺とじいさんは互いにじっと目を見て動かないまましばらくたった。正直驚いている。じいさんがこんな表情をするとは思っていなかったからだ。しびれを切らしたのかじいさんが呆れたように重く溜め息を吐いた。

「……じいさん？」

「……誰に似たのか、なんでそう頑固なのかな？」

「……ならそれはじいさんに似たんだろうな。」

「……僕はそこまで頑固じゃない。」

いやもうそこが頑固だろ、と目で訴えると目をそらされた。

「はあ、まあいい。しばらくはこの山で魔術なしの戦い方を教える。」

「魔術なしの戦い方……格闘技とかか？」

「そんな感じだ。」

「ほくん。それってどれくらいやるの？」

「完成度としてみれば、最低でも七割方できていけば一安心、九割方できていけば完璧、だ。」

「……なるほど。」

そしてじいさんは落とした荷物を拾って家の中に入った。

確かに、戦場に行くつつうなら戦闘術ぐらい覚えておかないときくつと死ぬからな。じいさんはそこまで考えていたのか。

「……これでまた、救える人が増えるんだよな。」

俺はそう自分にそう自分に言い聞かせた。

くくくくくく翌日くくくくくく

「……士郎、大丈夫かい？」

「……これが、大丈夫に、見えるか？」

「……見えないな。」

「……ストレートな意見をありがとう。」

俺は今何をやっているかと言うと、拠点のある山を舞台にしたチキチキ戦闘ありパルクール鬼ごっこである。じいさんが鬼で俺が逃げる側でやった結果、悉くボコボコにされて自分のいる場所が外だという事を忘れてうつぶせに倒れている。

「じいさん、いくら訓練でも木から落ちる仕掛けはよくないって……」

「……戦場でそんな甘い事は言っていられない。君のいう仕掛けだって予想していればかかったとしてもその後の対応次第では何度も立

ちなおせたと思うが？」

そう、じいさんはこの鬼ごっこ用に山中に罾を仕掛け、戦いながら俺はまんまとその罾のある場所に誘い込まれたという訳だ。

「畜生、何も言えねえ。」

俺が子供でまだ戦闘未経験者という事で手加減はしてくれていると思うが、それでもやりすぎ感がある。でもじいさんの言う事も正論だから尚更言えない。

「……けど動き自体は悪くなかった。」

「おつ、マジで？」

「ああ、むしろ良すぎるというか……」

「ああ、なるほど。体が覚えているっていう奴か。確かにそれだったら説明がつかない。」

鬼ごっこを初めて数分で体が慣れ、どういう動きをすればいいのか、どのルートを行けばいいのかが頭の中で道筋となったりと、色々とはよくわからない事が多かったがじいさんの言う通り、記憶をなくす前にそういうことをやっていたのなら不思議じゃない。

(だが、あの動きは実際に戦場でしか培われないものもあった。僕が仕掛けていた罾の方へ誘導しても直前で違う方向に向かった事もあった。あれは罾がどこにあるのかを把握してないとできない動きのはず。あれは生まれてからずっと平和に暮らしていた一般人の少年ができる芸当じゃない。)

「じいさんっ！」

「……いや、何でもなし。それより、もう休憩はいいのかい？」

「おうーもうばっちり回復したってばよー！」

(ばよっ！)

「……そうか。それならもう一度始めようか。」

じいさんは一瞬不思議そうな顔をしたが、見事に俺のポケはスルーされてしまった。悲しい……………

「……………次は時間いっぱい逃げ切つて一発入れてやるよ。」

「期待しないで待つてるよ。……………それと士郎。」

「ん？」

「今はいいが、これからは僕の事はじいさんと呼ばないでくれ。」

「……………えっなんで？」

まさか親子の縁を切るとか!? あんたから誘ったのに! ふざけるな! ふざけるな! 馬鹿や<sup>r</sup>

「仕事の時にじいさんと呼ばれたら敵に君が人質にされかねない。」

「なるほど、大体分かった。つまり敵に弱みを見せるなどじいさんは言いたいんだな？」

僕の早とちりでした。すんませんでした、じいさん。

「理解が早くて助かるよ。さて、そろそろ訓練を再開しよう。時間ももったいない。」

「ルールは？」

「さつきと同じ。制限時間は10分僕が鬼で士郎が逃げる。死なない程度なら何でもありの鬼ごっこだ。異論は？」

「なし!」

「……………よし。じゃあ僕はここで30秒待つてからスタートするから。」

「……………今度は逃げきれるといいね。」

「上等!」

そう言つて俺はそこからパルクールの要領で木の枝から枝へ渡つてじいさんから逃げていった。

今度は逃げ切り途中でカウンターの一発を叩き込むと心に誓って。

## 第四話 始まりの街へ

三人称 side

とある世界とある時代のとある場所に、黒い軍服のような衣装に黒いストールを巻いた男が一人、一冊の本を持って立っていた。

「おや？これはこれは……お久しぶりですね、皆さん。えっ？私が誰だかわからないって？ああ、あの時はまだ自己紹介もしていませんでしたね。では改めまして、私の名はウオズ。しがない預言者、と言えはよいでしょうか？」

男——ウオズはこちらに気づくと恭しく礼をした。

「さて、皆さんがここに来たということはいよいよ私の出番というわけですね？いいでしょう。では、やはりこれを言わねば始まりませんよね。」

そう言っつてウオズは持っていた本を開き咳ばらいを一つした。

「コホン、この本によれば普通の少年衛宮士郎。彼には養父である衛宮切嗣と同じ魔術使いになる未来が待っている。彼らは世界中の紛争地域を転々としながら人々を救ってきた。そして彼らは運命の地にて選択するでしょう。正義か、悪か……おつと、ここから先はまだ未来の話でしたね。」

ウオズはそう言っつて開いていた本を閉じた。

「えっ？この本は何なのか、ですか？……申し訳ないですが、まだこの本の事はお伝え出来ません。いずれ時が来たらその時に、いずれ………」

ウオズは本の事については何も言わずただ薄く笑いながら暗闇に消えていった。

~~~~~

士郎 side

よおみんな、俺だ。じいさんに拾われてから5年、俺達はじいさんの願いである戦いの根絶——恒久的な平和の実現を叶えるために世界中の紛争地域を転々としていた。

そして現在、俺にとつては（前世含め）久しぶりに日本に来た。俺が日本の空気を堪能していると黒い車が近くに停車した。その車の窓からいつの間にか消えていたじいさんが現れた。

「何をしているんだい、士郎？もう出発するから早く乗ってくれ。」

「はあ、今回もまた堪能する時間はないのかよ。で、今回はどんな用で日本に来たんだ？」

「それを含めて目的地に向かいながら話す。さ、時間がもつたいいい。」

それだけ言うと同じいさんは窓を閉めた。俺は溜め息を一つこぼし、急いで車の助手席に乗り込んだ。それを確認した爺さんはそのまま車を走らせた。

~~~~~

「士郎、椅子の間に今回の事に必要なものが入っているから今のうちに確認しときなさい。」

車を出してからしばらくした後、じいさんは資料を見るように言った。俺はその言葉に従い椅子の間にあつた資料を見る。

「んで？今俺たちはどこに向かつてんだ？」

俺は資料を見ながらじいさんに事の内容を聞いた。



「僕達は今、冬木市という場所に向かっている。」

「冬木市……そこに何があるんだ？日本は内戦とかテロとかもないからそこで殺し合いとかは起きてないはずなんだが……」

「ああ、もちろんそんな事は知っている。今回はこれまでとは根本的に違うんだ。」

「根本的に？特に変わった場所ではなさそうだが……」

渡された資料を見ても不良がいっぱいいるとか警察沙汰が起きやすいとかそんなものはなく、いたって普通の街だ。

「士郎、もう一つの冊子上の資料があるんだろう？そつちを見てほしい。」

そう言われ少し探してみると、持っていた資料の最後のほうに古い歴史書のようなものがあった。パラパラと読んでみるとそれは歴史書は歴史書でもとある一族にのみ焦点をあてたものだった。

「じいさんこれは？」

「それは“朔月家”という一族のものだ。」

「朔月家？」

「ああ。今僕隊が向かっている冬木の地で天正から続く由緒正しき旧家だ。歴史の長さ以外何もない家だが、一つだけ異常な点がある。」

「異常な点？まだ読み初めだからかもしんないけど今んとこ全然異常な点がないぞ？」

「ああ、恐らくそうだろうな、でももう少し読み進めていけばその異常性がわかるよ。」

「??？」

じいさんの言ってる事がまったくもって理解できないぜ……

とりあえず俺はじいさんの言う通り資料を読み進んでいくと、気に

なるものが一つだけあった。

「見つけたかい、士郎？」

「じいさん、これ……………」

「朔月家の異常な点…………それはその家で生まれた子供、正確には〃数えで七歳以下の女兒を見た者はいない〃」

「数えで七つってことは、七歳ってことか？なんでそれまで誰も見た人がいないんだ？」

「その答えはあくまで予想だが、僕はこれを神稚児信仰の生き残りと見ている。」

「神稚児、信仰？」

これまでじいさんと一緒に色んな国に行ってきた。俺はそこでその国の文化や宗教などを学んでいた。が、神稚児信仰なんて俺は聞いたことがない。

「なんだよその、神稚児信仰ってのは？」

「神稚児信仰とは、朔月家が信仰するもので七つまでは神の稚児…………数えで七歳を迎えるまでの稚児は人ではなく神や霊に近い存在である、そういう信仰だ。」

「…………なるほどな、大体わかった。聞きたいんだがじいさん。」

「なんだい士郎？」

「七つまでは神や霊に近い存在だとじいさんは言ったな。それはどういう扱いを受けるんだ？」

「調べた限りでは、どうやら子育ては母親が全て行っていたらしい。」

「母親が、一人で!?負担デカすぎだろ……………」

俺は驚きすぎて思わず少し声を大きくしすぎた。一族というぐらいなものだからそれは相当な人数はいると思う。でも全員が母親一人に子育てを押し付けていたっていいのか？自分の子供は自分で育てろってという方針の一族だったのか？

「子育てを母親一人で行っていたのには理由があつてね。その理由には朔月家の一つの特徴が関係しているんだ。」

「特性？」

「僕はさつき朔月家は歴史の長さ以外何も無いといったがその実態は人の願いを叶える女兒が生まれる特殊家系だったんだ。」

「人の願いを？」

「この時生まれる女兒、その子供こそが神稚児なんだ。」

「……なるほど。それじゃあ母親が子供一人で育てるのはなるべく人の思念に触れさせず、人として過ごさせるためだったのか。」

「ああ。朔月家の女兒はその特性から屋敷の中に人の思念を遮断する結界の中で七歳になるまで育てられるんだ。」

前言撤回。朔月家の皆様失礼なことと言ってすいませんでした。大変猛省しています。少し目がうるってなってしまうた。

「そういえば、七歳になったらその神稚児たちはどうなるんだ？」

「それ以上の歳になると突然人前に出てくるんだ。表向きには病室な体質が治った、親戚が引き取ったなどと理由をつけて人の世へと送り出されるんだ。」

「なるほどそうやって一族を繁栄させてきたんだな。ならその朔月家に頼めば爺さんの願いももしかしたら……」

「可能性は高くない。仮にそんな力を持つ子供が実在したとしても、彼らがその力を貸してくれるかどうか、その力が僕の望むものなのかも分からない。それでも、僕は……」

「……ま、何でもいいけどよ、肩の力を抜いていつも通りで行こう。ヒーローってのはいつだって落ち着いて行くもんなんだぜ？」

じいさんは俺がヒーローと言うと溜息と共に煙草を一服吹かしながら不満を漏らした。

「……土郎、何度も言ってるが僕はヒーローとは最も程遠い存在だよ。」

「なら正義の味方、なんて言ったほうがよかったか?」

俺がにやけながらそう言うときじいさんはまた溜息を吐いた。

「……そうだね、そっちのほうが僕には似合ってる。」

そう言うじいさんの目はどこか死んでいたといった感じだった。

「……じいさん?」

「……土郎、もうすぐ冬木市に着くからそろそろ荷物をまとめて——  
—!?!」

「グウェー!」

突然じいさんは車を急停車させた。その影響で俺は前に飛び出てシートベルトに首を抑えられた。

「げほっ、げほっ、っ、どうした、じいさん?猫でも飛び出したか?」  
「……………」

俺が冗談を言ってもじいさんは何も返さなかった。いつもは返してくれてるのに。

「おい、じいさん。ほんとに——」

「あれは……………」

「ああ?何言つて——っ!」

じいさんはただ一点だけを見つめ、その目は信じられないものを見る目をしていた。俺もそれにつられて爺さんの向いてる方を向くと、  
そこには——

「なんだよ、あれ……………」

冬木市の中心を飲み込んでいる黒い闇があった。

## 第五話 邂逅Ⅱ

「この本によれば普通の少年、衛宮士郎。彼にはいずれ父親と同じ魔術使いとなる未来が待っていた。前回、彼と彼の父親の衛宮切嗣は長い旅の果てに日本の冬木のちに自分たちの願いを叶える力を持つ搾月家の存在を突き止めた。そして二人は目的地の冬木市にて信じられないものを目にする。それは街の中心部を飲み込んでいる巨大な闇と一人の……おつと、ここから先はまだ未来のお話。」

~~~~~

士郎 side

「なんだよ、あれ……………」

俺たちの目の前には街の中心を飲み込んでいる闇があった。それは街ある建物も人も、全てを闇に沈めていた。

「おいじいさん！いったん外に出るぞ！」

「……………っ！待ちなさい士郎！」

俺はじいさんの言葉を聞かずに車の外に出た。外に出るとさらに闇を肌感じた。俺は爺さんにあの闇について尋ねた。

「じいさん、あれについて何か知っていないか？」

「分からない……………何が、起こっているんだ……………！？こんな現象、人によるものではない……………！」

（人の手によるものではない、か……………）

さて、推理してみよう。考えられることは二つ。ではそれぞれ順に考えてみよう。

一つ。この街の魔術師が行った儀式が暴走した。

だがこれはないと思う。なぜならじいさんの言った通り、これを人

の手によるものだったら、かなりの魔力が必要だと思うから。

では二つ目。搾月家が起こしたもの。

正直こっちの線の方があると思う。なぜなら車の中でじいさんが言っていた願いを叶える力。その力を使い誰かがあの闇を出現させた可能性。

「……なあじいさん。俺の気のせいじゃなけりや、あの闇どんどんでつかくなってないか!?このままじゃ街全体が飲み込まれるぞ!」

「……車に戻れ士郎!引き返すぞ!」

「……は?」

俺はじいさんの言葉に耳を疑った。引き返す?それってつまり……

「……なあじいさん。それってつまり、この街の人たちを見捨てるってことか?」

「……そうだ。今はそれが最善なんだ。」

「つぎけん!あそこにいる人たちが死んでもいいっていうのかよ!」

「必要な、犠牲だ……」

「なんでだよ!もしかしたら、まだ助かるかも——」

「士郎!現実を見るんだ!あれはどこまで行くか分からないんだ!下手に近づいてさらに被害が出たら、二元もこうもないんだ!」

「それは……」

「見て分かると思うがああの町の損害は異様だ。あの闇がどこまで広がるのか、だれにも予測できない。もしかしたらどこまで……いや、最悪の場合、国ごと……」

そう言ったじいさんは車の屋根を強く叩きつけた。その手はほんの小さく震えていた。そしてその顔は最悪の未来を本当に恐れているかのように怯えていた。俺もじいさんの気持ちや恐れているもの

もわかる。

けど――

「……じいさんの言いたいことはわかったよ。でも、それでも――」

突然俺たちの背後が強く光った。そして、闇の麓から突然放たれたその光が闇を包み込み、目を覆うほど強く光るり、再び闇があつた場所に目を向けるとそこにあつたはずの闇は光諸共消え去っていた。

「……なんだ、今の？」

「あの規模の闇が、一瞬で……？」

俺たちは今起きたその現象に理解できず、しばらくフリーズしていた。

~~~~~

フリーズが解けた後、俺たちは車に乗り込み急いでその場から離れた光の発生源へと向かった。けどその場でしばらくフリーズしていたのが悪手だったのか、途中で渋滞に巻き込まれてしまった。

じいさんは渋滞によって止まってしまった車に苛立ったかのようにハンドルを叩きつけた。……さっきからじいさんはイライラしすぎだと思う。やること全部終わったらカルシウムを取らせよう。

「くそっ！これ以上は車じゃ無理か！」

「見た感じはまだまだ渋滞は続きそうだな……なあじいさん、あの闇を消した光の発生源って地図を見る限りこの山を越えて竹林の道を過ぎた先なんだよな？」

「ああ、そうだ。ただ実際の場所は多少ずれてるかもしれないが……」

「なるほど大体わかった。ならここ周辺を見て回れば見つかる、か……ごめんじいさん。俺はこのまま先に行く！」

「待て士郎！……士郎！」



俺はじいさんの引き止める声を無視して子供特有の小さい体を駆使して、印をつけた地図を片手に人と人との間を通って闇があつたほうへと向かった。

しかしいくら子供の体が小さいからといっても、多少は人とぶつかってしまいどうしてもタイムロスは発生してしまう。

「ああ、くそっ！ワープできる魔術とか教わっとけばよかったわっ！」

そう愚痴りながら俺は光の発生源へと走った。

~~~~~

「はあ、はあ、全然見つかんねえなあ……………」

俺はじいさんと（勝手に）別れてから地図を見ながら光の発生源を探していたが、これが全くと言っていいほど見つからない。

（おかしい…………確かにここら辺だったような気がするんだよね……………」

「書いてある道はここが最後か。」

竹林の道を抜けるとそこは少し坂になっていた。そこを上るとそこには——

「ここが、あの闇があつた場所か……………」

目の前には街の中心部を飲み込んだ闇が残した巨大なクレーターがあつた。

「……………ここで犠牲になったあんたらのことは、忘れない。ひと段落したら、墓参りに来させてもらおうよ。」

そう言つて俺はクレーターに向かって小さく手を合わせた。それ

が今の俺にできるせめてものことだ。

「……早く見つけないとな。ったく、搾月家の屋敷ってのは一体どこに——」

考えに没頭していると突然小さく鈴の音が聞こえ音のほうを振り向けば、そこには闇の影響か大部分が抉り取られたかのような今にも崩れそうな日本屋敷があった。

(こんなところから鈴の音?)

「……誰かいるのか?! いたら返事をしてくれ!」

屋敷に近づき周辺に呼び掛けても誰一人として返事を返してこなかった。……シヤイなのかな?

誰もいないと思い一息つくと屋敷からまた小さな鈴の音が聞こえた。俺はもう一度目を凝らして建物内部を見てみると、そこには手鞆が転がっていてその近くには俺のほうを向いている日本人特有の黒髪に赤い瞳を持つ少女がたったひとりでいた。

「……………」

「……君は、誰——」

言い切る前に屋敷の柱が限界を迎え辛うじて支えていた屋根が少女の真上から落ちかけていた。

俺はそれに気づくと全速力で屋根に潰されそうになってる少女のほうへと向かった。

(っ、くそっ! この距離じゃ間に合わない! 頼む、まだ崩れるな!)

その瞬間、少女の上から崩れた屋根が突然止まった。理由は分からないがこの好機を逃す訳にはいかないと俺は急いで少女を抱きかかえ急いでその場から離れた。

「はあ、はあ、ギリギリ、間に合ったなあ……………」
(しっかし、さつきのは何なんだ？まるであの屋根だけが時間が止まったかのような気がしたんだが…………あれ？そういえば…………)」

『僕はさつき朔月家は歴史の長さ以外何も無いといったがその実態は人の願いを無差別に叶える女兒が生まれる特殊家系だったんだ。』

俺は車の中での爺さんの言葉を思い出した。確かに俺は屋根がまだ崩れ落ちるなど考えた。いや、願った。その願いが叶われ崩れるのが止まりこの子を助けられるだけの時間を稼げた。という事は、さつきの時が止まったかのような現象は今俺の腕の中に抱えられている少女が起こしたという事になる。つまりこの子が…………

「…………なあ、君の名前は……………」

「くる、しい……………」

「…………は？どういう……………」

「かあさまいがいに、だっこされたのはじめて……………」

「…………あつ、そういうことか。悪かった。痛くなかったか？怪我とかないか？」

最初は何のことかと思ったがどうやら強く抱えすぎたらしい。助けることに夢中でそこまで気が回らなかった。それほど必死でヤバかったということだ。

話を戻し、少女は俺の問いに頷き、無事なことを伝えてくれた。

「…………そうか。とりあえずここを離れよう。危ないのがいっぱいあるからな。」

「どこに、いくの？」

「さあな？とりあえず俺の親父のどこまで行くからそこまで寝ててい……………」

「うん……わか、った……」

「……ああ、おやすみ。いい夢を。」

少女はよほど眠かったのか俺が寝てもいいというとすぐに寝息を立てた。

「……さて、よっこいせと。とりあえずじいさんと合流が最優先だな。」

「それには及ばないよ。」

「っ！」

突然人の声が聞こえ少女を抱えながら声のあつた方から距離をとった。けどそこに立っていたのは敵ではなくむしろ俺の見知った人物だった。

「……安心しなよ。別に敵が変装してるとかではないよ。」

「……なんだ、じいさんか。あんまり驚かさないでくれ。びっくりするから。」

その人物は渋滞中の車から別れたじいさんだった。ここにいるってことはもう渋滞は解消したということだろうか？まあそれはともかく。

「……その子は？」

「ん？ああ、この子か。ここに来た時にあそこの屋敷に一人残されていたんだ。んで、屋敷の屋根が崩れようとしたところを、ギリギリ助けられたって感じだな。」

「そうか。それはよくや——待て、土郎。その子は、もしかしてあそこの屋敷から助け出したのかい？」

「えっ？あ、うん。たまたまここに来たら蹴鞠の鈴の音が聞こえてさ。そっちに行ったら屋敷があつたんだよ。」

そういうとじいさんの目がいつもより数段鋭くなり俺を——いや俺の腕の中にいる少女を見つめていた。俺は何かまずいと思い少女をじいさんから見えないように抱きしめた。

「……じいさん？」

「……もうすぐ雨が降る。ひとまず車に戻ろう。その子も連れて来なさい。いいね？」

「……ああ、わかった。」

言いたいことが終わったのかじいさんは俺達には目もくれずおそらく車を止めているところまで向かっていった。俺はその後ろ姿を見ながら一つの不安がよぎった。それは俺が少女のことを話した時のじいさんの目が変わったからだ。世界中の紛争地域を回っていた時、事件の主犯に向ける目と同じでとても冷たい目を……

「……頼むから変なことは考えないでくれよ、じいさん。」

俺はただそう願うしかできなかつた。

第六話 その瞳に映るのは……………

「この本によれば普通の少年、衛宮士郎。彼には父、衛宮切嗣と同じ魔術使いとなる未来が待っていた。彼らは目的地である冬木市に向かう途中の山道で街を凄まじい速さで飲み込もうとしている巨大な闇があった。だがその闇は二人が対抗策を話している間に突然現れた強烈な光によって跡形もなく消滅した。衛宮士郎はその原因を探るべく光の発生源へと向かった。そこで彼が見つけた少女の名は……おっと、ここから先はまだ未来の話でしたね。」

~~~~~

士郎 side

やあみんな、俺だ。あの後俺は雨の中で朔月家の屋敷の人達の墓を一つだけ作りじいさんと合流して山の麓辺りで止めていた車に誘……保護した女の子を乗せた。

「…………じいさんがこの子を見たときの反応から見ると、この子がその……」  
「…………じいさん、その資料でなにか分かったことはあるか？」

俺は近くの岩に腰掛け朔月家の資料を読んでいるじいさんに声をかけた。

「…………とりあえずその子の名前は判明した。名は朔月美遊——朔月家が秘匿し、継承し続けた神稚児。資料によれば屋敷の中には結界が張られていて出産も育児も全て、その中で完結していたようだ。……まあ今回の件でこの冬木市にいる朔月家は彼女だけ、となったみたいだ。」

「…………そうか。なら、墓作つといて正解だったな。」

そう言いながら俺は美遊を助けたときの出来事を思いだし納得した。

(……やっぱあの屋敷は朔月家だったか。これで屋根が崩れたときの事も説明がつかぬ。あれは朔月家の一族であるあの子——美遊だからできた芸当、ということだな。)

「士郎、僕らはどうとう、見つけたかもしれない……」

「……何をだ?」

「しらばつくれるなよ。君が救ったあの少女が朔月家の人間だとして、くに気づいていたんだらう?」

「……だったらなんだよ。」

俺はわざとしらばつくれた。じいさんが何を言いたいのかを分かったうえでだ。

「そういうえば、まだ士郎には話してなかったね。朔月家の神稚児の力のことを。」

「……人の願いを叶える力じゃないのか?」

「そうだ。だがその力はただ願いを叶える力じゃない。朔月家の神稚児……その力の本質は人の願いを無差別に叶える力なんだ。」

「願いを、無差別に……!?!」

「まだ願いを叶えられる範囲や人数などの細かいところはまだわかってはいないが、それでもその力は絶大だ。君も見ただらう?あの巨大な闇を一瞬にして消し去った光を。あれは恐らく朔月美遊が冬木にいる人々の願いを聞き取りそれを叶えたんだらう。」

「……もしかして、朔月家の子達は小さいときから人の願いを叶えてたのか?」

仮にそうだったとしたら恐らく子供の脳には入りきらないほどの情報が入り、脳がパンクするだらう。物理的に。

「いや、普段は人の思念を遮断する結界の中に隔離し、母親のみの手で朔月家は六年かけて神の子である女兒を人の子へと落とす。」

そんなことはなかったことに俺は密かに安心した。

「……でも人の思念を遮断していたのに願いが聞き取られたのはなん  
でだ？」

「恐らくあの闇が朔月家の結界を破ったんだ。あれは朔月家にとって  
想定外のことだと考えている。まあとにかく、結界が破られたこと  
よって人々の溢れるような怒濤の願いが屋敷に届き願いが叶えられ  
たんだ。」

あの闇で犠牲になった人はまだ判明していないが、それでもかなり  
の数の人が犠牲になった。

その人たちは恐らく、“死にたくない” “助けて” といった願いが  
多いだろう。その全ての願いがこの子のもとへ行き、彼女はそれを叶  
えた。

美遊の力はじいさんからしてみたら、自分の長年の夢を叶えられる  
唯一のものなんだろう。現に今のじいさんは静かに歓喜していた。

「……旅は終わりだ、 士郎。」

「……………」

「この子は僕が使う！そしてこの地で、人類を救おう……………」

そういったじいさんの目はどこまでも冷たい正義の味方の目をし  
ていた。

士郎 side out

~~~~~

ウオズ side

いつもの場所にいつもの本を持ったウオズが本を広げ、まるで誰か
に聞かせるかのように話した。

「かくして、魔術使い衛宮切嗣とその息子衛宮士郎は日本にある冬木
という街で一人の少女と出会ったことで世界を救う力を得た。この
出会いが後に、世界を賭けた戦いが起きることになるのは、まだ誰も
知らない物語。」

そう言つてパタンつと本を閉じ、踵を返して何やら喜ばしい表情と共に暗闇へと消えた。